

フィラデルフィア
日記



玉置 由紀子

目次

2月21日	出国	1
2月22日	初めての夕食	2
2月23日	カース先生に電話	3
2月24日	郵便局・銀行・病院へ	3
2月25日	学校でオーラルインタビュー	4
2月26日	市庁舎へ	5
2月27日	カース先生と再会	6
2月28日	プレースメントテスト	6
3月1日	オリエンテーションの日	7
3月2日	バスケットボールの試合観戦	8
3月3日	リバティ・ベル（自由の鐘）	9
3月4日	図書館ツアーと演奏会	9
3月5日	生理痛でダウン	10
3月6日	父と電話で話す	11
3月7日	初めての授業の日	11
3月8日	ジュリアさんの死	12
3月9日	フラワー&ガーデン・ショー	12
3月10日	新しいホームステイ先	13
3月11日	キャロルさんの家	14

3月12日	デйнаとクシャとその叔父	14
3月13日	大きな家	15
3月14日	各国の直面する問題	15
3月15日	ディスカッション	16
3月16日	裁判所へ	16
3月17日	セント・パトリックス・デー	17
3月18日	娘さんがイスラエルから帰国	17
3月19日	宗教問題	18
3月20日	フランクリン・ミルズ・モール・ツアー	18
3月21日	怠惰な日	19
3月22日	野菜炒め	19
3月23日	高齢者施設へ	20
3月24日	家族からの手紙	20
3月25日	父の来訪	21
3月26日	ユダヤ人にとって大切な日	21
3月27日	映画館へ	22
3月28日	友からの手紙	22
3月29日	娘さんはイスラエルへ	23
3月30日	小さな美術館	23
3月31日	GAPで服を買う	24
4月1日	教会へ	24
4月2日	終日宿題	24
4月3日	エピスコパル教会へ	25

4月4日	カース先生からの電話	25
4月5日	頑張りすぎて疲労	25
4月6日	グリーンフィールド学校へ	26
4月7日	変な日本料理で腹痛	26
4月8日	気の合わない人	27
4月9日	ワシントンの桜まつり	27
4月10日	終日勉強	28
4月11日	エイズについて議論	28
4月12日	キウ君の結婚	29
4月13日	セルマ先生の家へ	29
4月14日	プリッツェル作り	29
4月15日	高校生のミュージカル	30
4月16日	ニューヨークへ	30
4月17日	フランクリン科学博物館へ	31
4月18日	ロサンゼルスからの客人	31
4月19日	あと2日	32
4月20日	友達とランチ	32
4月21日	最後の授業	33
4月22日	愛しのサーティース・ストリート駅	34
4月23日	さようなら、フィラデルフィア	34
4月24日	一生の宝	36
エピソード		37

2月21日 出国

日曜日 日本では雨

今、ユナイテッド航空でこの日記を書いている。

ああああっ、アセッターー！ ふーっ。もしK氏がいなければ、いまの私はないといっても過言ではない！
まず初めの失敗としては、名古屋空港で国際線と国内線をまちがえたことである。

私は国内線だと思っていて、大変余裕をかましていた。それがそもその間違いであったと思う。名古屋空港で入国審査もやるのであった。成田から外国へ行く人はすでに国際線扱いなのだった。私は9時15分発のフライトなのにチェックインした時刻は30分前の8時45分であった。

「お客さん、横入りはいけません！」

横入り、横入り、イミグレではまた時間がかかってぎりぎりまで出発時刻20分遅れて最後の10人に入ってしまった。なさけなし、でも「乗れてよかった〜！」コレしかない、本当にもう。

【格言】 空港に2時間前に着いても決して早くない！

8時間、ポオーっとしているのは、死ぬほどヒマ、である。う〜っ。成田からシカゴまでとてつもなく長いフライトだった。

となりの人と少し話をした。中国から来た女の人で夫と17歳10ヶ月の娘がいるとか。後ろに座っていた女の子は短大1年生。1年間彼女もペンシルベニアで留学するとか。奨学金つき女子大いいなあ。彼女ちゃんと乗れたのだろうか。

初めは緊張していたが、今は早く一刻でも早くフィラデルフィアに行きたいとはやる気持ちがおさえられない。何せ12年前のことだ。すいぶんと変わっているのだろうか。

空港でチャーチル先生と、シンガーさんに会ったとき、私はうれしくてワナワナして泣けそうになった。やったー、やっと着いた、うれしい！

お母さんに電話したら、またこれが泣けるのです、まったく。

ステイ先のご主人シンガーさん、奥さん、娘、息子、犬1モダン、犬2、お祖母ちゃん、家政婦のアニーがこの家の人だ。

美しい白い家だった。私のためにバラを買って歓迎してくれたのが大変うれしかった。早くこの家庭になじめたらよいのに。そうなるよう努力しよう。何しろたった2ヶ月しかないのだから貴重な時間をむだにすぎないようにガンバル！ とにかく今日は疲れていて頭が集中しないし、耳鳴りもひどい。早く休むことが先決である。 Good night!

2月22日 初めての夕食

火曜日 晴れ

今日は午前中ぼんやりとすごした。突然お手伝いさんがやってきたのは驚いた。『風と共に去りぬ』に出てくる使用人のマミーにそっくりなイメージであった。私が手紙を書いていると犬たちが勝手に入ってきて私は寝るに寝られなくなったので、仕方なく一緒に寝てやった。ついでに写真も撮った。

午後、ダイアナさんが帰ってきた。スワースモア駅やスーパーへ行った。以前住んでいたコンドミニウムにも行ってきて、懐かしい所をいっぱい見てきた。全てがあこのころのままであった。スワースモア小学校にも行ってきた。

今日は家族と共に食事する初めての夜だ。しかし、堅苦しい雰囲気と英語の嵐によって私の胃はキュツとしぼんでいる。食後、ダイアナさんと今後のことについて話し合った。

「明日はどうするの？」

「家でリラックスしたい」

「私はあなたが1日中家にいるのは賛成しない。なぜならあなたには少しでも多くのことを学んで欲しいから」

そう言われて私はすごく感動した。この人は本当に私のためを思って言ってくれているのだとしみじみ思う。消極的になっていた、私は。でも、それでは何事も進まない。私は彼女のようなすばらしいホストマザーにめぐまれたことを幸せに思う。変わるぞ！ みんなのいいところだけ取ってきて。必ず変わるぞ！

今日は一度に色々なことをした（お風呂、洗濯機の使い方など）ので少々疲れてしまった。早く寝ようと思う。

2月23日 カース先生に電話

水曜日 雪のち雨

雨。きのう言っていた通り。せっかく銀行と郵便局に行こうと思っていたのに。それにしても、昨日はとてもよく眠れた。ぐっすりと。

そしてまた初めての試み。

何かという電話をかけたのです、カース先生とキャロルさんに。キャロルさんはいなくて代わりにラヒムさんが電話に出た。カース先生は昔と変わらずに落ちついた上品な話し方でやはり素晴らしいと思う。インテリジェンスを感じさせる。そして、今週の日曜日の27日に彼女の家におよばれることになったのです、うれしい。

ラヒムさんには今日の午後電話すると言ったのに、オリンピックを見ていたら電話する機会を失ってしまった。明日の夕方にまた電話しようと思う。

お昼は何だか猛烈に眠くて知らないうちに寝込んでいた。午後はダイアナさんと車の修理屋さんに行ったり公衆電話のかけ方を教えてもらったり、色々なことについて話をした。ストックキングの話、セールスマンの話、事故のこと、父のことなど。

本屋さんにも行ったがなかなかおもしろかった。村上春樹の本があった（『ダンスダンスダンス』）。さて、明日は絶対銀行と郵便局へ行くぞ!!
おやすみっ。

2月24日 郵便局・銀行・病院へ

木曜日 雨

今日は朝から雨であった。

そして初の試みである郵便局と銀行へ行ってきた。

スワースモアカレッジにも行ってきたし、ストラスハーペンにも行ってきた。何も変わっていないかった。私たちがいつも遊んでいた公園も幼稚園もスケートした川も町も。それらすべてをかみしめながら目に焼き付けていた。12年の歳月はふきとんだ。坂道から見える美しい家も、本当に私にとって大切なものだったことがよくわかった。

午後、再びアニーの車でジュリアさんの病院へ行く。私にとってこれが将来何かの役に立つかどうか分からない。でも何事も経験である。私のおばあちゃんは現在72歳。あと10年したらどうなっているのかわからない。

夕食のとき、お年よりや障害者の人に対する公共施設、保険について話し合う。ここでは車椅子のサインをよくみかける。今日はいろいろなことについて話をした。

「私のことや私の国の文化について話したい」

夕食のとき、私はそう言って持ってきたアルバムをシンガー家の人に見せた。たった2カ月しかここにはいられない。だから英語が十分話せないからといって、ここで卑屈になってしまうのは絶対イヤだと思ったからだ。ホストブラザーのベン君は退屈してどこかへ行ってしまった。

私は父のことについて話した。そしてシンガーさんとも話をした。

「あなたはいつ也大変疲れていて、ため息をついています。私の父はそうじゃありません」
ご主人に言うど、

「私は仕事が忙しいし、年をとっている。でも、いろいろな趣味があってちゃんと休息をとっているから大丈夫だよ」

と答えてくれた。

「そんなことないでしょう？」

私は思ったままを表現した。

「私の父とあなたはちがっているけれども、根は同じだ」
父もシンガーさんと同じくらいに仕事熱心なのだ。

私はたとえどんなに失礼でも相手が不快に思ってもそれを必ず言おうと思う。たった2カ月しかないのだからこんな荒治療しかない！ と思う。早くこの家に私は慣れることができればいいと思う。

交通費 5ドル

絵ハガキ 2ドル12セント

切手代 1ドル 高い！

計 8・12ドル

2月25日 学校でオーラルインタビュー

金曜日 晴れ

今日は色々なことをした。朝シンガーさんと共に朝食をとり、学校へ行く。サーティース・ステーション駅へ行く。シンガーさんは大変仕事熱心だ。電車の中では行くときも帰るときも仕事をしたり、新聞を読んだりしている。駅を見て私は色々と思いついた。このホームで男の人と女の人がだき合ったり、キスをしていて光景を思い出した。ここは少し都会である。いろいろなお店がある。シンガーさんの研究室につれていってもらった。ここはすべてが伝統につつまれている。広い。

そしてELP事務所へむかう。ここで書類をもらって授業料を払い、IDカードをつくってもらった。PENのカードがうれしくてさっそく使ってみた。図書館へ行く。そこでしばらくすごしてからオーラルインタビューをうける。なかなかいい手応え。そしてシンガーさんと共に帰宅する。今日は充実していた。もっと早く英語がすらすら話せるようになりたい。ここに来て、私の英語会話力も急にUPした

ように思う。高いレベルでの話がしたいと思う。

今日の支出

トラベラーズチェック 1625ドル 支払う

朝 交通費 75セント

合計 1625・75ドル

2月26日 市庁舎へ

土曜日

今日は市庁舎へ行ってきた。市庁舎のてっぺんにペンの像があって私はそこで写真をとる。耳がちぎれんばかりにさむい。JFK通りを歩く。百貨店にも行ったが、やはり高い。そこらへんをうろついてショッピングモールへ行く。ケイジャン料理をたべる。ここは都会ですべてが活気にみちている。ワシントン、ニューヨークはもっとこみあっているらしい。いつか行ってやらなければなるまい。ふっふっふっ。

本当にアメリカは様々な人種がいる。それをまざまざと感じさせられた。でもそれがアメリカなのである。当たり前なのである。いちいちふり返ることもない。

観光案内所にも行ってガイドブックをもらってきた。これらを読みこなすのがまた大変である。まあガンバルしかない。

今日、少しベン君と話した。彼の発音は大変わかりにくい。早い。彼ともいつか分かりあえるようになると思う。

少しずつ、少しずつだ、全く。

おみやげ 19・15ドル

交通費 Rose Valley と Suburban 往復 3ドル

合計 22・15ドル

2月27日 カース先生と再会

日曜日 とても良い天気

今日は本当によく英語をしゃべった。大変有意義な日だった。ちょっとだけ疲れたけどね。朝起きると、ダイアナさんがパンケーキを作っていたので私も手伝った。とてもおいしかった。あとスクランブルエッグも。

朝食のとき、ご主人がイスラエルの問題について話していた。私は例のごとく何を言っているのか50パーセントぐらいしか(といっても単語が少々耳にとびこんできただけである)理解できなかったが、さかんにWEST BANKという言葉がきこえてきたのでそのことを質問すると「いい質問だ」といってゆっくりとてもわかりやすく説明してくれた。シンガーさんはすばらしい人だと思う。

午後、カース先生と会った。私は感激のあまり涙ぐんでしまった。考えもしない涙がでてきたので、自分身に驚いてしまった。カース先生は白髪になっていた。でも優しい眼、やわらかな物腰などはそのままだった。体全体から春の日ざしがこぼれているような人だ。

孫のキティちゃんが進めちゃめっちゃかわいらしかった。1歳半で言葉を話しはじめている。キティちゃんは、家中の人が目にいれても痛くないほど状態であった。だんなさんは時計をなおす技師らしい。なんだか淡々としている人だったが、多分良い人にちがいないであろう。

そして私たちはいろいろなことについて話し合った。バーゲンセールのこと、スポーツのこと、日本の受験システムのこと、家族のこと、女性の生き方についてなど。そしてまた必ず会いましょうと約束した。とにかく今日は本当に充実した日であった。あしたから学校が始まる。とりあえずプレースメントテストを受けよう。

2月28日 プレースメントテスト

月曜日

今日は本屋へ行った。大変広い。そして大学内をもう少し歩き回る。プレースメントテストはむずかしかった。帰り道、電車をまちがえて少々あせった。しかしなんとか帰ってきた。少し帰るのがおそくなってしまった。キッチンで夕食していたら、ベン君に「なぜそんな所で食べているの？ 僕みたいに」と言われてしまった。

今日は夜みんな外にでてしまい、私がジュリアさんの世話をした。下の世話まで私がやるとは！ はっきりいって私にとって喜ばしいことではない。むしろ泣きたくなるようなことだった。

私はどうしても耐えきれず日本に電話した。でも留守電だった。いつの間につけたのかしら。私ははけ口を求めてキャロルさんに電話した。彼女は自分の父も認知症になったからよく分かる、と言ってくれた。けっこうそれでスッキリした。

ダイアナさんが帰ってきて少しおばあさんのことについて話した。ジュリアさんはガンの手術をしているらしい。そして薬でみにくい体になっているのだと言った。

「でも彼女は生きているわ。それで十分よ」

ダイアナさんが言ったときに他人と肉親ではちがうのだと思った。どんな姿になっても彼女はジュリアさんに生きていて欲しいと願っている。私は彼女に対してそういう気持ちを持つことがあり得るだろうか。

バス（定期券） 108・75ドル

電話 30セント

合計 109・5ドル

3月1日 オリエンテーションの日

火曜日

今朝は美術館へ行った。興味深かったが、それほど時間がなかったので1階しかみることができなかった。小学生達が先生に連れられて来ていたのが、興味深かった。日本ではこのようなことはなかった。やっぱり日本は文化レベルが低いのかなあ。

オリエンテーション。50人位いるかな。私は初心者クラスになった。そしてスーランという子と友達になった。色々なことについて話した。家族のことなど彼女は韓国からやってきて、いとこがここにいるらしい。父は兵器を売っているらしい。姉は日本文学専攻、弟はホテルマンになるべく勉強中らしい。彼女はドミトリーにすんでいて孤独だという。明日、彼女と美術館に行くことにした。私たちは話すのに熱中しすぎてカレッジツアーを忘れてしまった。あれあれ。

昼 4・43ドル

おかし 75セント

合計 5・18ドル

3月2日 バスケットボールの試合観戦

水曜日 雪

今日はまたまた美術館へ。ルーシーと共に。彼女の英語は非常にわかりにくい。でも日本人と共に過ごして日本語を使っているよりは数倍ましだと思う。私とて大してしゃべれるわけでもないのだから。志は同じと思いついて我、彼女とすごすことを当面の間は欲す。朝鮮では「ハイチーズ」と言う代わりに「キムチー」と言うらしい。さすがキムチ王国である。毎日キムチを食べるのだそう。その後、マルチメディアの講習をうける。

夕方、バスケットボールの試合を見に行った。これが大変大変よろしかった。まさにこれぞアメリカ！と言わざるを得ない。行く途中、ベン君と話した。彼は若いけどしっかりしている。自分の意見を持っている。私が17歳のとき、彼のような考えを持っていただろうか。彼は宗教や日本の受験制度にさえ言及した。アメリカでは、だれもがあのように意見を持っているのだろうか？ このような知的水準の高い家庭で育てばそれも当たり前なのかもしれない。

私たち日本人は、宗教や他の国で起きた事件について深い関心をもたない。それはやはり日本は島国であるし、単一国家である、など様々な要因があるだろう。そして自分自身を変えようと思わないかぎり、何も変わらない。

アメリカでは色々なことが実際問題としてふりかかってくる。深刻なのだ。彼らから見れば私たちなどのんきなものに見えるだろう。しかし、ここにきているアジア系の人々はみな「このままではいけない」と考えていると思う。そして日本は島国だから関係ないと言ってられないことを自覚していく、あるいはしている人たちのだろう。

ところでバスケットボールだが、興奮した！ ペンシルベニア対プリンストンの試合で試合の合間に、お互いの音楽隊が、競演するのだ。指揮者はすごい形相をしてはげしく指揮棒を振っている。チャリダーは、飛んだり跳ねたりするし、マスコット人形はおどるし、お金を服の中に入れてという奇妙な催しまであった。選手は注目的である。私はバスケットボールの試合を見るのは初めてだったが、叫びまくった！

【格言】スポーツって、いいものですね。帰りの車の中で一緒になった、ホストブラザーの友人に話しかけてみたが、あっさりばかにされたようで、全く相手にされなかった。くやしい！ もっと英語を話せるようになりたい！ もっと英語をわかりたい！

今日はいろいろなことについて考えたなあ。

電話代 10 + 35 || 45セント

昼 7ドル

3月3日 リバティ・ベル（自由の鐘）

木曜日 雪

今日もまたひどい雪であった。かなり早く出たつもりだったのにやはりスワースモア駅で止まっていきなり逆もどり。大学へは行けないなあなどと思っていたらサーティース・ストリート駅へ着いた。

やはり悪天候すぎて、参加者はひどく少ない。日本人1、タイ1、残りが全部韓国。でも今日は色々な人たちと友達になれて私はとてもうれしかった。インデペンデンスホールやリバティ・ベル（自由の鐘）、銀行など見て回る。そしてマルチメディア（ワープロ）講習をうけた。私にとってこれはあまり役に立ちそうもないけれど。

その代わりいっぱい友達を得ることができた。スウェーデンから来た人やタイから韓国の人々など、さびしいのはみな同じ。友達になりたいという気持ちもみな同じ。ここにいる間に私は自分のとるべき道を必ず見出すだろう。彼らと共にすすむことによって、また自分自身も変わることによって。

食事 5・5ドル

3月4日 図書館ツアーと演奏会

金曜日

今日もまた非常に実りの多い日だった。朝、図書館案内に参加する。まだどうやって使うのか、私はよく分かっていないと思います。まあ、気にすることはないだろう。今日もたくさんの人と知り合いになった。ハンシヤンはおもしろい人でスパニッシュ。ソング、私のボディガード。タケさん、まさとし、ジョン（マリア）、ゴー（タイ）などなど多すぎておぼえきれないけど、ウェルカムパーティーにより私は多くの友を得た。うれしい！

日本人ともなるべく英語で話すように心がけた。スーランも次第に緊張がほぐれてきたようでマサ（彼は世界中を旅するのが好きらしい）と私とスーランで会話したとき、ずいぶんと色々なことをきいていた。そしてスーランの寮につれていってもらった。スーランの友達がやってきたのでまた話をする。そしてソングとその友達と夕食をする。シンガーさんの研究室までついてきてもらった。なにしろ辺りは大変暗かったので。

夜、オーケストラの演奏をききに行く。私にとって初めての経験だったが、音楽アカデミーは大変広い。そしてゴージャズ!! 優雅である。なかなかよい。

タケさんと話をしていて私は自分の甘さを指摘された。彼は29歳でIBM（コンピューター）会社に勤めているという。コンピューターに疲れたので休みをとるためにこのプログラムに参加したという。彼は、私はもっと自分の考えを煮詰めるべきだと指摘してくれた。そして現実の厳しさについても。

一体私は何をすべきなのだろうか。何を考えなくてはならないのか、わからない。でもそろそろ決める時期だろう。やっぱり私はビジネス（営業）がやりたい。そしてコンピューターを学ぶことはこれから何をやるにしても不可欠だろう。

私は女だ。結婚についても考えなくてはならないだろう。やはり女としてできる限りのことはしたいと思う。25、26はもう結婚するには遅いのだろうか。私は今20歳。順調に卒業できたとして22歳。大学であと2年間も国文学なんぞやって、何になるのか、私には全くわからなくなってきた。無駄に時間を過ごすことにならないか。決断しなくてはならない。

夕食 10・25ドル

昼 3・59ドル

カフェ 2・50ドル

合計 16・34ドル

3月5日 生理痛でダウン

土曜日

うー何てこった。私は生理痛のため、この日は日記すらかけなかった。えーっと、何をしたんだっけ？

まず朝ソング君に電話してベン君とトランプをやったのだけ。午後はジムへ行っていい汗かいた。

そしてACMEへ。夕食時にPKOの話をしてうっ、だめだ。これ以上かけず、失礼！

3月6日 父と電話で話す

日曜日 晴れ

今日は昨日よりさらにヒドかった。でも少しずつよくなってきているのだが。私が1日中ボーっとしているのでご主人が「薬は要るか」「熱は無いか」と心配してくれる。私がホームシックだと思っているのかしら。

することがなかったから家に電話をした。久しぶりに父親と話してうれしかった。お母さんは絵を描きまくっているらしい。お兄ちゃんや友人2人をつれてきてきてスキーに行くところらしい。私は水着を送ってくれと頼んだ。何だかホッとした。このところ夢にも家族ができてきたし。やっぱり自分の家っていいなあと思う。もちろんここだって好きだよ、私。

3月7日 初めての授業の日

月曜日 晴れ

今日は初めての授業の日。1限目はレビン先生のアメリカ社会。なかなか手厳しい。でもダイアナさんにテキストブックを見せたら、この本はなかなかよいといっていたからアメリカ社会を知るには悪くない本なのだろう。さっそく宿題を与えられた……うれし涙。

2限目はボス先生。リーディングとライティングだ。優しい感じ。いよいよ本格的な授業のはじまりだ。もう遊びはおわり！

帰りの電車の中でアシスタントの人と会ったので少し話をした。

「ビジネスに興味があるんです」

「日本のビジネスマンはよく見かけるわ。でも日本でビジネスウーマンになるのはむずかしいと思う」と言われた。アメリカでは全く普通に、多くの女性が高い地位を与えられているという。

彼女の言った言葉で私が非常に感銘を受けたのは「これはまだ始まりにすぎないのよ」という言葉だ。そうか。まだ始まりなのだ。私はもっと変われるし変らなくてはならない、と感じた

テキスト代 21・95ドル キャッシュで払う

30・85ドル

昼 4・15ドル

3月8日 ジュリアさんの死

火曜日

今日ジュリアさんが亡くなった。

私にとってはやはり自分の肉親ではないから、なげき悲しむという気持ちではなかった。家族の人ももう仕方ないという感じではなかっただろうか。私には悲しみよりも安堵の方がより感じられた。ベッドに横たわっていた人がいなくなつて、ガランとした部屋を見たとき、なんともいえない気がした。

今日、スーランと一緒にお昼を食べた。でもすぐく腹がたった。コーリアングループーがいっぱいでは完全に無視された。私はとてもいらいらした。彼女とはしばらく話したくない。

ボス先生の授業は詩の鑑賞。なかなかおもしろかった。

「Sunriseは、ただ単に日の出を表すだけではなくて世界の平和を表していると思います」

私は発言した。しかし科学を専攻している韓国人がこの詩には何も感じない、と言ったので私も意地悪な事を言ってしまった……けど、スッキリした。

ダイアナさんはひどく疲れている。彼女が悲しそうにしているのは何よりもつらい。明日、私はフォースさんの所へ行かなくてはならない。ここ気に入っていたのに。でも違ったアメリカンファミリーにふれることができるのをラッキーだったと考えよう。

テキスト代 多分? 74・75ドル キャッシュで払う

かさ 6・95ドル

昼 5・15ドル

3月9日 フラワー&ガーデン・シヨウ

水曜日

今日の授業は一つだけ。

「アメリカ社会」では独立宣言についてディスカッションした。むずかしい。私はほとんど口をはさむことができず、くやしい。はっきりいって、質問の意味すら分かっていなかったと思う。ついつい受験式の答え方をしてしまう自分が情けなし。ただ自分の考えを出すことが、これほど私は苦手だったかしら。他の人は私よりいろいろなことを知っているように思う。でも、私だってそのうち変わる。大丈夫、気楽に行け！

午後、フラワー&ガーデン・ショウへ。

タケさんと、私、ユングとその女友達とで。変なメンバーだなあ。とにかく混んでいる。私はそれほど感動！ しませんでした。それより、キスをめぐる話の方が、興味深かったです。

今日は別のステイ先フォースさんの家へ引っ越し。元のホストファミリーの家が恋しい。しかし、もう私の居場所はないし。ひとり味気なくドミトリーに住むよりはずっとましだろう。ここには犬がいない。それがさびしいといえさびしい。

3月10日 新しいホームステイ先

木曜日

今日は人権宣言、憲法、独立宣言について話し合う。うーん、私には「アメリカ社会」の授業はハードだ。まっ、いい。ボス先生の詩の授業は好きだ。

今日、新しいホームステイ先に帰ろうとして、道に迷った。失態、失態。駅に戻って新しいステイ先に電話をかけたら、息子のビルさんが車で迎えに来てくれた。

それにしてもこの家族は巨大だ。何てみなさん、大きいのでしょうか。我が家とは比べものにならない。アイスクリームが山のように盛ってあるビルさんの分を見たとき「なっ、なに！」とってしまった。ビル夫妻には、ジャック、チェスという息子がいる。まだ歩きはじめたばかりだ。ジャック君はおもちゃの汽車の音をきくと、体を揺らしてリズムをとる。おもしろい。子はかすがいだ。赤ちゃんを見ていると飽きないね。

3月11日 キャロルさんの家

金曜日

今日は銃について論じた。ボス先生は文法についてやさしく語って下さいます。

さて、私は今どこにいるのでしょうか。

何とキャロルさんの家にいるのであります。そして、私は彼女の息子のクシャ君の部屋で寝ている。不思議。

私が子どものころ、父の仕事の関係でアメリカに住んでいたのは小学校3年生、9歳のころ。キャロルさんは当時よくしてくれた隣人だ。彼女の髪は今ではもう真っ白になっていた。彼女の声は、随分と若々しい。そして何となくケケティッシュな感じのする人である。

彼女の夫のラヒムさんは、病気で闘病中らしい。彼を見たら、最初のホームステイ先で少しだけ一緒に過ごした、グランマのか細い指を思い出してしまった。それ以上言うことはもうないだろう。

夕食の時、キャロルさんと色々話した。12年ぶりの思い出話に花が咲く。

「夕食は冷凍庫から好きなミールを取ってね」

と言われた時は少し驚いた。介護や仕事で、彼女はとても忙しいのかもしれない。彼女とこうしてゆっくり過ごせるのならば、手の込んだ夕食じゃなくても別にいい。

当時は仲良くしていたデйнаとクシャにも早く会いたいなあ。部屋には彼らの写真が飾られている。彼らは最近、ガールフレンドとのデートで忙しいみたいだ。私より大きくなっているのかなあ。それとも逆かしら。

3月12日 デйнаとクシャとその叔父

土曜日

今日は私にとってすばらしい1日となった。キャロルさんの息子達、デйнаとクシャに再会することができたのです。彼らは私ほど成長していません。つまり私は大きすぎたのです、またもや。

彼らは変わっていません。顔や形は大人になったけど、彼らの性格は、そう変わってはいない。弟のクシャは陽気で明るい。兄のデйнаは深刻な雰囲気漂っている。でもふたりともすばらしい人間性を持っているにちがいないだろう。兄はコンピューターグラフィックスを、弟はエンジニアリングを学んでいるという。

もうひとり、すばらしい方に私は出会った。多分この人と出会わなければ私はとても後悔していたと思う。私は自分が大学で国文学を勉強していることに対して大いなる疑問を持っていた。すると一緒に来ていた彼らの叔父が、

「あなたが国文学を学んでいると聞いてとてもうれしい。日本人は金、金、金……そればかり追求しようとする」

私もそういう典型的な日本人になることを考えていた。でも今の国際状況を考えると、この姿勢を少しでも変えていかなければ、日本はますます嫌われ者になってしまうだろう。

私は自分のやっていることに対してもっと誇りをもつべきなのだと思う。新しい戸を開くことがすべて良いことだと思うのはまちがいだ。自分が手にしているものはつまらない石だと思って捨ててしまうのはまちがいだ。

多分、私が求めていたのはこれだったのだろう。宗教についても、いつかここに書こうと思う。

3月13日 大きな家

日曜日

今日は忙しい日だった。朝はキャロルさんとゆっくり過ごし、午後はフォースさんの娘さんの誕生日会。キャロルさんに家まで送ってもらう。楽しい週末の後には、たくさん宿題が。

午後4時ごろに、娘さんの家へ。何て大きなお屋敷なのでしょう!! プールまでついている。思わず写真をとる。ここでもまた宿題をやる。しかし元気な子供達が4人もいては集中できるはずもなし。

今日の夕食は娘さんのご主人が作るみたい。チキンとサラダとブロッコリー。なかなかおいしかった。バスデーキーまであって私は食べ過ぎだと思います。あすはシリアルでヘルシーになろう。とにかく、宿題をやらなきゃ。

3月14日 各国の直面する問題

月曜日 晴れ

ステイ中に、使ったお金は日記に書くか、レシートをノートに貼って記録している。日記が家計簿代わりだ。

今日のランチは、サンドイッチコンボ。オレンジジュースも買って、計4ドル75セント。プレーンベールのサンドイッチにレッドチェリーを添えたもの。

今日は、アメリカや自分の国が直面している問題について話し合う。アメリカでは移民問題が、重要なトピックみたい。次の時間はボス先生の詩の解釈。うっ、何だか今日は喉がいたい。

3月15日 デイスカッション

火曜日 晴れ

今日は、明日の裁判所見学に備えて、デイスカッション。レベル400のクラスでは、短いエッセイを書く。今日は宿題に追われて、日記を書いている暇があまりない。日本の友人に、大学の文法講義の登録をお願いする。

3月16日 裁判所へ

水曜日 晴れ

今日は、裁判所へ行く。映画でしか見たことがなかった裁判の実際のような様子を見ることができた。

最初、何だかザワザワしていてここが本当に裁判所なのかしらと思っていた。でも手錠をかけられた人が歩いていったのを見たたん、「ここはやっぱり本当に裁判所なのだ」と感じた。日本の裁判所には行ったことがないから、比較することはできない。日本の裁判所はこことはまた違った雰囲気なのかしらと思う。市役所付近はフィラデルフィアの観光名所のひとつにもなっている。にぎやかだ。ツアー参加費は、6ドル、ランチは1・65ドルの支払い。

それにやはりアメリカは陪審員制度をとっているため、裁判は本当に市民の手によってなされている。夕食のとき、フォースさんの奥様と話をしている感じがした。実際に陪審員をやったこともあるらしい。ご主

人も手紙を受け取ったことがあるそうだ。そしてそれをすることは市民の務めだと考えていると話してくれた。

ご主人は会議で今日はいない。奥様とはアメリカと日本のデザートの違い、公立学校と私立学校のメリックとデメリック、など。色々としゃべりすぎて、最後は眠気を催した。でも、これらを英語で全部話すのは、本当に勉強になる。とても良い経験になったと思う。

3月17日 セント・パトリックス・デー

木曜日 晴れ

今日は、アイルランドの祭日、セント・パトリックス・デー。

ボス先生は風邪でお休み。代わりに来た先生の授業は、恐ろしく退屈すぎた。

裁判所のレポートをやっていたら日記すら書けず。チョコレートケーキを食べて糖分補給。

家に帰ると私は明日、元のステイ先に戻るようになっていた。フォース夫妻と最後の夕食。とても楽しかった。フォースさんが日本の映画の話をしているときに「海からやってくる怪獣が東京を食べてしまおうという映画を見た」と言ったので私は大笑いしてしまった。涙がでるほど、笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだった。そして母に電話をする。長々と話してしまった。やはり肉親っていいものだなあ。

3月18日 娘さんがイスラエルから帰国

金曜日 雪！

冬が戻ってきたみたい。さっきフォースさんの家から荷物を移した。彼らはステキな夫婦だったよ。そしてステキな家を持っていたよ。ビッグな夫婦だった。典型的なアメリカ人だなあ。スーツケースに荷物をつめ、心も体もビッグなヒル夫妻に別れを告げ、元いたステイ先のシンガー家へ移動。娘さんがイスラエルから一時帰国していた。私は彼女の部屋を使っていたのだ。

「娘が帰ってきて自分の部屋がなくなると悲しませたくないの」と亡くなったグランマの部屋を案内された。

「今度はここがあなたの部屋よ。テレビもシャワーも好きなように使っていていいわよ」
ダイアナさんは笑顔で言う。

娘さんは歯の治療のために帰国して、一度に4本も歯を治療したらしい。そのせいか彼女は、むっとしてる。

今日は金曜日で、ユダヤ人の方にとっては特別な曜日。宗教的な祈りをささげ、私には理解しがたい話をしてる。しかしこの英語の嵐は快感だ。

今日で滞在予定の半分の日程が過ぎてしまったけど、もっとすばらしく英語が話せるようになりたいぞ！

3月19日 宗教問題

土曜日

今日は1日中宿題をやっていて味けなし！ でもダイアナさんと色々なことについて話し合った。私はここに来て一番感じるのそれぞれが異なった宗教を持っているということである。

宗教は様々な問題を解くカギになっているように思う。

キャロルさんもそのように言っていた。ダイアナさんはそれらの宗教の違いを、それはそれでよしとしましようと言っていた。「大きいことは必ずしも良いことだとは限らないわ」というダイアナさん言葉が私にとっては印象的であった。

3月20日 フランクリン・ミルズ・モール・ツアー

日曜日

今日は朝から失敗してしまいました。まず集合時間を8時だと思い込んでいた私は、朝5時30分に飛び起きて、6時23分の電車に乗るべく、駅へと向かったのです。でも電車は来なかった。6時23分の電車は、日曜日はなし！ そんなのあり？ 私はしょげて帰った。

しかし。これは私の全くの勘ちがいであった。実は集合時間は10時30分だった、ということでは無事、フランクリン・ミルズ・モールツアーに参加できたのです。

フランクリン・ミルズ・モールはとんでもなく広かった。アウトレットモールだそう。私はここでもまた自分に合う靴を見つけられずに悲しい。ジャケットもさがしたけど、服の代わりにあやしげな人形を買った。

今日はスーランのドミトリーに滞在しています。彼女と色々なことを話しています。彼女はジャーナリストになりたいそう。私はそれ、彼女に合っていると思う。彼女は見かけによらず芯が太そうである。押し強い子だ。

ここはとても夜景がきれいだ。フロアに行くペン大の学生達が踊っていた。少し見ていた。自分の大学のことを思い出した。それから部屋に帰ってスーランとまた少し話す。オルゴールを一緒に聴いた。何だか耳に心地良い。いつかまたこの曲を思い出さう。

3月21日 怠惰な日

月曜日

今日はあまり勉強をしていません。

下らないテレビを観て過ごしてしまった。何かここにきて、私は少しだらけてしまっていると思う。やっぱり、父が今週やって来るのは良いことだと思う。それに要領も少しずつ覚えてきたし。

ああ、私、だらけている！

明日の朝は早く起きておふろに入ろう。そして図書館で勉強しようと思う。

3月22日 野菜炒め

火曜日

なんてこった。今日の夕食はごはん野菜のいためもの。

私は大変感動して食べすぎてしまい、私の胃袋が大変なことになった。「葉を」と叫んで家族中を？という状態にしまった。

なんて人騒がせなやつ。

お昼 4・28ドル

3月23日 高齢者施設へ

水曜日 晴れ

今日は高齢者施設へ。すばらしい天気であった。春を感じる。今日の課外活動はあまり参加しなかった。ステイ先で亡くなったグランマや、キャロルさんの夫の衰弱した様子を見ている。これ以上は見たくないという気持ちがあったからだ。

この高齢者施設はまるでホテルみたいに豪華だ。でもここは不思議な世界。ここにいるのは看護人と老人だけ。私はここがあまり好きになれない。どんなに素晴らしい設備があっても、楽しいイベントが催されても、ここは決して天国ではない。私が年を取ったら、ここに住むようなことは決まらなと思う。老人は色々なことを知っている。次の世代へと伝えるものがあるはずなのに。ヘルステアがただ単に予算を増やすとか表面的な改善にとどまっているのなら、何が変わるのか私にはよく分からない。

明日は父がやって来る。
うれしいなあ。

3月24日 家族からの手紙

木曜日 晴れ

今日はお父さんとリオさんとチャーチルさんとそのガールフレンドと共にお食事をしました。酔っぱらったお父さんが大声で話しをするので、私はとっても恥ずかしかったのである。

食事が終わってステイ先に戻ると、お母さん、おばあちゃん、そして父からの手紙が届いていた。それぞれ個性が出ている。お母さんからの手紙は特に感動してしまった。やっぱり私のことをよく理解しているね。あったかいよ。

そして父からは「字をもっときれいに書きなさい」とのこと。この年でそんなことを言われてしまったのが情けない。こんなきたらしい字をかいていたのでは、人格疑われるよなあ、いつか（いや、もう既に疑われている？）。

日本の文化を愛しています、と言っているのに日本語がこんなにヘタでは、やはりマズイ！
説得力が無い。反省、ザル（猿の絵）します。
ノート 3・99ドル

3月25日 父の来訪

金曜日 晴れ

今日、父がシンガー家へ夕食を共にするためにやってきた。帰ってくる時、駅で偶然に出会う。はつきりいって初心者にとってこの家のスタイルは少し難しいだろう。お父さんはまごついていました。でもそれはそれ。文化が違えば食文化も違うのだから、別に下品だということにはならないだろうと思っている。

それにしてもお父さん、弟の話ばかりして私は少々聞きあきてしまった。よほど気にかかるらしい。帰るとき、出口がわからなくて父は地下室へ行こうとして大笑い。

シンガー家のご主人が相撲取り（すもうレスラー）を「すもうレストラン」と聞き間違えて大笑い。とに角、嵐のように父は帰っていったのであった。おわり

ランチ

サーテイス・ストリート 駅で

プレーンベীগル 0・75ドル

プレーンクリームチーズサンド 0・55ドル

3月26日 ユダヤ人にとって大切な日

土曜日 晴れ

2日分の日記をまとめて書く。土曜日と日曜日はユダヤ人にとって大切な日。だが、私は仏教なので関係ないのである。

モーセが奇跡を起こしても私にとってそれは単なる伝説にすぎないのだ。

3月27日 映画館へ

日曜日 雨

週末、町の映画館に行き、『シンドラーのリスト』を見た。私にはこの作品の良さがいまひとつよくわからない。場面、場面はともショッキングでしたし、モノクロの画面はすべてをひきしめていましたし、赤いドレスの女の子は血、犠牲のシンボルとしてうまく使われていた。でも私はあの主人公が好きになれません。偽善を感じてしまった。映画『バグジー』を見たあとに感じた気持ちと同じだった。

アメリカって不思議な国だ。つくづく。この家庭を見てると特にそれを感じる。日本で宗教に熱心な人は、「この人は変な人」という目を向けられるのにここでは逆。

それにしてもまだ彼らは歌をうたっている。私はなんだか頭がガンガンしてきたので逃げてきました。彼らの宗教は尊重するけど、私はついていけない。

同じユダヤ人でも、リオさん一家はそこまでこだわりが深くない。アロムが人見知りしない人でいろいろと私の世話をしてくれて私は退屈しなかった。彼らはそれほど宗教にこだわることなく会話を楽しむと言っていた。

彼らはすべて日本のことに大変よく通じていて（通じすぎである！）私にすると質問をいっぱいしてきた。彼らの話し方はなんだか聞き易かったなあ。それに答え易かったなあ。これは私の英語力が少しでも向上したということなのかしら。

久々に再会したアイリスはすっかりキャリアウーマンになっていた。眼鏡をしていなければもったきれいだらう。

3月28日 友からの手紙

3月28日 友からの手紙

月曜日 雨

今日は非常に眠くて全く目が覚めなかった。やはり昨日のトンでもなく長い宗教歌のせいであろう。宿題もやらずに寝てしまった。

今日は映画『ドライブイング・ミス・デイジー』を観た。

「アメリカ社会」の授業では、国際結婚について話をする。私はそれに関連して、韓国と日本の関係について話し合った（というより私が勝手に話しただけ）。

家に帰ると友達から手紙が来ていたので早速読む。なんだかうれしい。こうやって手紙をもらおうと。やっぱり彼女を信頼してよかった、持つべきは友達。返事を書こう！

3月29日 娘さんはイスラエルへ

火曜日 雨

ホストシスターがイスラエルに帰っていった日。彼女とは同じ年だし、もう少し話す時間があるとよかったのになあ。せっかくフレンドリーになりかけていたのに。でもいつかまたこの家族には出会えるような気がしている。彼女は私の家族と会うかもしれない。もしそんなことがあるなら、彼女のこと大切にしてあげて欲しいなあ。部屋も使わせてもらって、一番、彼女には感謝している。

所で私は明日、美術館へ行くつもり。タケさんが急に一緒に来たいと言い出して、私は泣きたくなってしまう。もーいいかげんにして！ セイヤさんは大人だけどタケさんは一体……。あーあ、何てことでしょう。オー・マイ・ゴッド！

3月30日 小さな美術館

水曜日 晴れ

今日は2つの美術館へ行った。小さかった。あまりにちっぽけで驚いてしまった。ダイアナさんにそのことを言うと「それがフィラデルフィアの美術館だと思わないで」と言う。

セイヤとウンカンと私でランチを共にする。

彼らは私より年上なので教わることが多い。そして大人である。知的である。ウンカンと来週末ニューヨークへ行くことにした。ガイドブックを買って研究しようかな。

3月31日 GAPで服を買う

木曜日 晴れ

GAPにて衣類を買う。生理になった。

衣類 102ドル

サラダ 3・88ドル

プリッツェル 1ドル

4月1日 教会へ

金曜日 教会へ行く。

4月2日 終日宿題

土曜日

終日宿題！ 何も良い考えが思いつきません！

4月3日 エピスコパル教会へ

日曜日

エピスコパル教会へ。アフリカ系アメリカの教会とはまた違っていた。それについて書くときに、ホストマザーに色々教えてもらい助かった。ダイアナさん、ありがとうございます！

4月4日 カース先生からの電話

月曜日

カース先生とその孫娘に会った。土曜日のツアーに行ったけど有益な情報は特に得られなかった。多くのツアーはもう既にいっぱい。残念だけど。家に戻ったらカース先生が電話をくれて、彼女の夫と共に車でワシントンに連れて行ってくれる、ですって。私って、何て幸せ者なのだろう！ 本当にラッキー。偉大なる先生に感謝します。

4月5日 頑張りすぎて疲労

火曜日

どうしてだか分からないけど最近ひどく落ち込んでいる。疲れていると思う。頑張り続けるなんてできないし、少し休息することが必要だと思う。アメリカの家族と生活して、怠けたりしないよう、いい娘

を演じてきた。でも何だか、毎日笑顔でいるのに少し疲れてきてしまった。元気になるために少しだけ怠けよう。別にそれも悪いことではないと思うし。

昨日は何もしないでテレビを見ていたけど、内容が重くてよけいに疲れてしまった。ああ。

4月6日 グリーンフィールド学校へ

水曜日

今日はグリーンフィールド学校へ行ってすごくいい時間を過ごした。1時間は短すぎる。子供たちから元気をもらって感謝している。

夕食の後、ダイアナさんと卒業について話をした。日本とアメリカの卒業式は、違っていて、それが興味深かった。日本の卒業式ではあんなこと、ないものね。

4月7日 変な日本料理で腹痛

木曜日

エドワードとクラスで2回、話をした。私は彼のこと、理解できない。彼はいつだって深刻過ぎるもの、なんだかコメディイみたい。一見、勤勉な生徒に見えるけど、多分ちがう。

彼の性格ははっきりしてなくて、(すばらしいとは言いがたい)だから彼のエッセイを読むことが出来なかった。

このごろ、「光陰矢の如し」ということわざは本当にそうだなって思う。この長い旅も残すところ18日。私は夕食に日本料理、うどんを作った。これは私のオリジナルレシピ。でも食べたらお腹の具合がおかしなことになってしまった。ああ、やってしまったな、私。「あれが何なのか、僕には想像できないよ……」ホストブラザーのベン君がホストマザーと話しているのが聞こえてしまった。彼らは私の料理に対して決してコメントしようとしなかった。きっと驚きすぎて何も言えなかったのだと思う。笑える。

4月8日 気の合わない人

金曜日

エドワード！ いいかげんにしろ！ アンタ、頭おかしくない？

4月9日 ワシントンの桜まつり

土曜日 終日晴れ

今日テレサ&ジョー夫婦と共にワシントンの桜まつりへ行った。

車で片道3時間程かけてボルチモアを通してワシントンへ。とても素晴らしい天気。まるでこの日が私たちのためにあるような天候だった。

ワシントンDCではあらゆるものを見た。12年前、父の留学でアメリカにいたときに見たホワイトハウスも、目新しいものに思われた。そしてどこからこれほどの人々が集まってきたのかしらと思うくらい、人、人、人だらけ！

しかし決してそれは不愉快ではない。むしろ共にこの春の日を満喫しようという感じで心よろこばしいことであった。

桜はそれほどたくさんあるというわけではなかったが、とに角、桜まつりなので私たちはパレードを見ることができました。なんだか久しぶりにこういうパレードを見た。なつかしい！ 今日には本当によく歩いた。こんなに歩いたのって久しぶりだ。私は運動不足です。

国立自然史博物館、ワシントンモニュメント、ホワイトハウスなどなど、挙げれば切りがないほどたくさんものを見た。

私が一番考えさせられたのは、ベトナム戦争慰霊碑を訪れたとき。

はじめはそれが何なのかわからなかったけれども、ベトナム戦争で亡くなった人たちの名前が慰霊碑には彫られていたのだ。慰霊碑は百メートルくらいの距離で建てられていた。人々が自分の親族の名前を見つけてスクラッチしていた。それはとても生々しい光景だった。私は自分の国のことについて（戦争）ほとんど何も知らない。私は広島に行ったことすらない。

「日本にはこういうメモリアルな場所やセレモニーはあるのかい？」
一緒にいたジョーにそう聞かれて、

「日本人は忘れっぽいのです」

としか言えない自分のことを恥ずかしいと思った。

それにしても私は赤の他人にこのようなすばらしいもてなしをうけたことがあるだろうか。こんなわがまま娘のために3時間もかけて車でワシントンに連れていってくれて帰りにはとても高そうな中国料理の店に行ったのです。

私はとんでもなく幸せ者です。恵まれすぎていておそろしいです。テレサはすばらしい婦人です。キュートです。ジョーは少年のようで、どうしてテレサとつりあっているのか私にはよくわからない。でも根が明るい人だ。彼らはアイスクリームショップで働いていたのがきっかけで高校生のとき知り合ったそう。意外だ。

私はもう彼らとは一生会わないかもしれない。今日が最後だったのかもしれない。でも私はいつかここへ戻ってきたいと思う。彼らを私が一生忘れないでいようと思うように、私のことを思ってくれたら幸いだ。

このすばらしい日を決して忘れることなんてできないだろう。

4月10日 終日勉強

日曜日 雨

勉強、勉強、勉強・・・

4月11日 エイズについて議論

月曜日

エイズについて話し合った。とても興味深かったけど、新たな発見はなかった。なぜかというエイズについてはもう既にたくさん学んでいたからだ。

4月12日 キウ君の結婚

火曜日

今日は、アルコールについて話し合った。クラスメイトに2人、医師の方がいて、実際の医療や予防についてセルマ先生の代わりに教えてくれた。

それと、新しいニュース！ があるのです。

韓国人クラスメイトのキウ君が、母国で結婚したのです。面白いことに、彼のルームメイトは、私達のクラスメイトなのですが、そのことを全く知らなかった。

彼、ショックをうけていたみたい。もちろん、冗談でリアクションしてくれたとは思っけどね。

4月13日 セルマ先生の家へ

水曜日

セルマ先生の家へ。ベスと話す。彼女の家には誰もいない。

4月14日 プリッツェル作り

4月14日 プリッツェル作り

木曜日

電車で遅れる。チャーチル先生に会う。プリッツェルをホストマザーと一緒に作る。のぶ子と学校で話す。35ドル使った。

4月15日 高校生のミュージカル

4月15日 高校生のミュージカル

金曜日 大変美しい天気

夜、ホストブラザーの通う高校で生徒によるミュージカルが行われるということでホストマザーと共に学校へ。やはり机の並べ方が気になる。ミュージカルはとも本格的でプロっぽかった。私は日本の教育の場における文化レベルの違いを感じた。なぜだか異様に会場が寒かった。家に帰ってからウンカンとジーハンに電話をする。彼らに私の困っている状況を聞いてもらう。ジーハンのアドバイスはとても役に立った。

例えば、

- ・直接的に言わないこと。遠まわしに言いなさい
- ・彼には真実を知る権利がある

とか。

それゆえ私は彼の言う通りにした。

4月16日 ニューヨークへ

土曜日

ニューヨークへセプタ（フィラデルフィアの公共交通機関）を利用して行く。

ニューヨークはフィラデルフィアとは全く異なった雰囲気を持った都市である。ニューヨークを「若者」と表現するならフィラデルフィアは「老人」と言ってもよい。

ブロードウェイを歩いていると特にそれを感じる。一番驚いたのはドラッグが当たり前のように路上で売られていたこと……クレージである。とは言え、アメリカンドリームが実現出来るのはきつとニューヨークなのだ。ここでは色々な人種がミックスされていて、異国籍カップルもたくさん見かけた。

ウンカンが家にやってきて泊まっていた。そして彼女と色々なことについて話しあった。彼女は物知りで、飽きることがなかった。

ウンカンには私に写真を見せてくれた。彼女は友達を（特に同性）大切にしていると思った。私は自分に時間があまりないことを悲しまない。自分がやるべきこと、やりたいことを私はつかんだ。それをとっても誇りに思うし、喜ぶたい。

4月17日 フランクリン科学博物館へ

日曜日

フランクリン科学博物館とフィラデルフィア美術館へ。フランクリン科学博物館はとても大きかった。やはりポーランド美術館とは大違い。

フランクリン科学博物館の特徴は国別に部屋が分かれていた。日本部屋はあったけどタイ、韓国、ロシアの部屋はなかった。フラワースhowerでも日本部屋があった。日本はとも小さい国だけど日本の文化を愛する人は多いと感じている。アジアの中で日本文化は特別なカテゴリーとして認識されていることを知る。

メタニー、ウンカン、オーガ、ホストマザーのダイアナ、そして私という妙なコンビネーション。神話に関する絵を多くみかける。

フィラデルフィア美術館の方は、科学館という感じ。博物館の映像、迫力があつた。

オーガは医者になりたいらしい。8カ月でペラペラ。彼女は賢いだろう。全く物おじしない。ロシア語でさようならはパカと言うらしい。

4月18日 ロサンゼルスからの客人

月曜日

いよいよ最後の週になってしまった。でも私は悲しまない。エンジョイしよう。

今日は電車がとんでもなく遅れてしまった。

1時間半！ 家に帰ったのは8時。

ホストマザーの兄夫妻が来ていた。
似ている！

何て似ているのでしょうか、この方々は。驚きだ。彼らはロサンゼルスに住んでいるらしい。
ロスと言えば、

1. ディズニールランド
 2. ハリウッド
 3. ビーチ
 4. アーティストがレコーディングにやって来る
- という。そして、様々な人種の人々が住んでいるという。

※飛行機の予約リコンファーム済

4月19日 あと2日

火曜日

ホストマザーの兄夫妻が帰っていった。あと2日しか学校にいけないのか？

4月20日 友達とランチ

水曜日

ハン・ウール（日本&韓国料理レストラン）へ行く。友達のカンとしゃべり。家に帰る途中、チャーチル先生に会う。テレビで映画『ラスト・オブ・モヒカン』を観た。

4月21日 最後の授業

木曜日

今日は最後の授業だ。

全てのものには終わりがある。私はこの2か月で自分がとても成長したと思う。ここに来なければ考えなかったようなことについてもたびたび考えた。友情について、宗教について、人種問題について、家族の在り方について、など。

この2か月を振り返ったらとても素晴らしい2か月だったと確信するだろう。

電車は私を乗せて最後の授業へと決して止まることなく運んで行く。私はそこから降りてしまおうと思わない。終わりがなければ始まりはない。終わりがなければ始まりもなく、のっぺりとした空間だけが存在することになるから。私は今ここにいる私以外にはない。先のことは分からない。でも、何も分からなくても不安に思わない。普遍的だよ、その状態は。

私、泣いたりするのかな。

でも、地球は果てしなく広がる宇宙ほどは大きくない。こんなに小さな惑星に住んでいて、再び会えないはずないさ。今日の日のすばらしい春の日差しのように、陽気明るく考えたいものだ。

別れは意外にあっさりしていた。いつもの授業の終わりのように。

韓国人の親友ウンカンがキーホルダーを記念にくれたとき、少しだけ悲しかった。私も用意しておいた手紙を渡した。このときだけは本当に悲しかった。涙ってひとりであるときに出てくるものなのかな。どうしてだかのどが詰まって、胸が苦しくなって、本当に不思議だと思う。

スワースモア小学校の恩師カーズ先生にフィラデルフィアで再会したときは、感情より先に涙が出てきた。あの涙は自分でも予想していなかったが、今度は泣きたくて泣いた。泣いた後は、なぜか気持ちがおさまって、少し自分が強くなったような気がする。

自分はとても幸せな大学生だと思う。自分のやりたいことが見つけれない（なかった？）不幸な大学生にならなくて良かったと思う。私はこの幸福なときを出来る限り幸福に過ごしたいと思う。

村上龍だったか、ある小説の中で、彼女と別れるときに、「幸せになったものが勝ちなんだよ」と言っていた。彼の言葉は粗削りだけど、真実を分かっている。私も少しずつ分かりかけている。

私たち大学生は「今、幸せ？」と聞くことは「今、彼氏とうまくいっている？」という意味。日本的な婉曲表現のうちのひとつなのだ。

4月22日 愛しのサーティース・ストリート駅

金曜日

今日はいろいろなものを見納めする日！

私はサーティース・ストリート駅が本当に好きだった。このベンチに座ってアイスクリームをなめながらぼんやりと人が行き来するのを見るのがとても好きだった。駅っていろいろなスタイルがあると思うけど、ここほど落ち着ける駅ってないと思う。あるときはダンスパーティーがひらかれていてとてもびっくりした。様々に着飾った人が駅の中を歩いていても不思議と馴染むのです、この駅は。

4月23日 さようなら、フィラデルフィア

土曜日

昨日は忙しくて日記を書くひまが全然なかった。でも最後の1日を本当に楽しく過ごすことができ、私はとても満足している。本当は家で最後の夕食をシンガー家の人と共にするべきだったのかもしれないが、私の体はひとつしかない。1度に2つのことを出来るほど私の体はうまくできていない。

最後の1日をどうやってすごしたらいいのか、私は色々考えた。私はこの街がとても好きだ。フィラデルフィアは私の故郷だと言うことができる。

それゆえ最後の1日、私は街中を歩き回ることにした。チャイナタウンに行った。門（ゴールデンゲイト？）がやはり一番印象深かった。ワシントンでも通りすがりに見たけれど、うーん、ワシントンの方がやはり大きかったなあ。チャイナタウンを歩いていて不思議な気がした。ここはアメリカなのにまるで別物である。

アジア系がやはり多いけれど、アメリカ人（このように言うことがためらわれる。アメリカ人は誰なのか、何なのか。でもとりあえず便宜上使用することにする）もちろん見かけた。でもここで見かけると彼らの方がビジターに見えてしまうのがおもしろい。

宝石街にも行った。私にはそれほどすばらしいとか、へえ〜とか感じるものはなかったと思う。はっきりいってこの雰囲気はあまり私になじまない。

リバティ・ブレイスにも行った。そういえばここでコーヒーをクラスメイトと飲んだ。ここはすばらしくきれいだ。店は高そうだ。そしてここでカードを買った。サンキュー、の方が、グッドバイの方を買うか、少し迷った。結局、グッドバイの方を買った。多分自分で言うことができないと思うから。「さようなら」の言葉が本当にその意味通りに使われると何だか悲しい、正直にいつて。

人はどんなときに「さようなら」って言うのかな。

「さようなら」の語源は何なのかな。

「さようなら」を言うとき、人はどんな気持ちなのかな。どんな願いを込めるのか。何を決意するのか。すべて興味深い。「さようなら」だけで本が1冊書けると思う。

最後の日、ペンシルベニア大学が見たくて、またベスと話をするためにベネットホールへ。彼女を待っている間、日本人の方が話しかけてきたので、その方と少し話す。スペインに行くと言っていた。そこから手紙を書くと言っていた。本当かな？ まあそんなことはどうでもよい。

ベスと神話について話す。アメリカではそのようなものはないと言ってもよい。何せ200年ぐらいしか歴史がないのだから。それが強みでもあると思うけど。

彼女と共にダウンタウンを歩きまわる。私が「イタリア料理を食べたい」と言ったので、彼女と私でそのようなところをさがして街中をうろろしていた。するとちょうどいいあんばいにイタリア人医師の軍団に会う。彼らが紹介してくれた店はすばらしく高そう。ハローバイ！と言って見つけた店は通り過ぎてしまった。ドクター達の「少し高い」は、私の「非常に高い」の意味であることがわかってとても勉強になった。

ベスの家にも行った。彼女の両親はなんだかとてもインテリな感じがする。ドクターとナースなのだそうです。ふむふむ。彼女はドイツ系アイルランド人で、アメリカではどちらの国籍ですか？ と聞くのが常だと言っていた。

彼女の家の近くの近所のイタリアンバーへ行く。この雰囲気、好きだ！ と考えた。とても混んでいた。しばらくしてベスの幼なじみがやってきた。彼らは陽気で本当にナイスな人たちだった、全く。1人は警察官、もう1人はアクセントに興味を持っているという人で大変楽しい人達だった。警察官の彼によると、アメリカではスピード違反の取り締まりを上空からするらしい。いかにもアメリカならではのエピソードである。

私が今まで会ってきたアメリカ人はみな日本によく通じている人ばかりだったけど、彼らは日本に関するかぎり無知だと言ってさしつかえないだろう。日本の家が紙でできている訳ないでしょう。

バスとはたった5時間と少ししか話さなかったけど、彼女の気安さ、フレンドリーなところ、陽気なところ、私は好きだ。彼女は必ず日本にやってくるだろう、と私は感じている。

家に帰るとご主人は既に眠っていた。
ホストブラザーともさようならをした。

4月24日 一生の宝

日曜日

今、シカゴの空港でこの文を書いている。

この2カ月、私にとって何だったのだろうか。アメリカって一体、何、わからない。何に一番印象を受けたのか。

それはこれから考えていくべきことだろう。今はただなにかもがあわただしくて、何がどうだと言うことは無理だ。

今はうまく答えられなくてもいいと思う。人に問われ、自分に問いかけて、自分なりの見方ができればそれでいいのだ。

ただシンガー家の人たちには言いようもないほど感謝している。すべての面で私を支えてくれた。彼らの生活スタイルは興味深く、ただ自分の家のスタイルだけしか知らなかったら、私は狭い視野の人になっていたと思う。

特にホストマザーのダイアナさん、あなたはとても素敵な女性です。すべての女性にあるべきものを持っています。私が快適にいられるように、あなたがどれほど気を使ってくれたか、私には想像もできない。

私はここにいて満たされないものはなかった。自分の家族であるかのように思うことができた。そして彼らも私に対して娘のように接してくれた。彼らについて書きだしたらもうきりが無い。それほど私の生活の大部分をしめていたと思う。

また、かけがいのない友達を得ることができたのを幸せに思う。またメタニー、朝早く電話してくれるとは思わなかったよ。君の心遣いを私はとてもうれしく思うよ。君とは同じクラスじゃなかったけど、とても信頼できるやつで、君とは一生つきあっていくと思うよ。そして友情を育てていこうね。

私はいろいろな人と出会って、心と心が一時でも通じ合えて同じ時を共有できたことをとても幸せに、誇りに思う。それはわたしにとって一番、一生の宝になるだろう。

そして分かったこと——良い友を得ようと思うのなら自分がその人にとって良い友であるように努力

すること、良い友にめぐりあえないのは自分がそうではないから。そのことに気づくことができず、本当によかった。多くの友達を持っていてもその誰とも心が通じ合うことができなかつたとしたらその人はとても孤独だ。私は孤独じゃない。私には友達がいらない、友達は私を信頼してくれないなどと、なげくことはもうない。

心と心が何となく通じ合えばそれでいい。何とも表現し難いこのバイカイ物を私は友情と呼ぼう。

エピソード

これは私が20歳の大学生だったころ、1994年にフィラデルフィアに2カ月間滞在したときにつけていた日記である。私は小学生のころ、父の仕事の関係で、8カ月ほどフィラデルフィアに住んでいた。帰国後もアメリカの旧友や恩師と手紙で交流を続けていた私は、大学生のとき、単身でフィラデルフィアを再訪した。

20歳。

今思えば何と自由で、無鉄砲だったことだろう。

50歳を超えた今の私からすると、信じられないほどの行動力があつた。自分のことなのに。まるで自分のことではないほどに、まぶしい。

20歳だった当時の私は、何でも見てやろう、吸収してやろう、世界とはどんなものか見てみたい、そんな気持ちでいっぱいであつたのだ。

「アメリカに行きたい」

そう決めた私は、大学入学と同時に英語の勉強をはじめた。留学先の情報を集め、知り合い、コネ、何か利用できるものはないだろうかとひたすら探しまわつた。

すると、幸いなことに父の知り合いのアメリカ人で、イスラエルに私と同じ年の娘さんが留学しているユダヤ人のご家庭があるということで、そこで2カ月間、ホームステイさせて頂けることになった。こんなに珍しい体験ができることなど、人生には二度とないだろうと、毎日、日記を書いた。

フィラデルフィアはアメリカ合衆国、ペンシルベニア州南東部に位置する都市であり1776年の独立宣言が発せられ、自由の鐘など独立に関する史跡も多い地として知られている。

自分が育つてきた環境とは異なる場所で、2カ月間、敬虔なユダヤ人一家と暮らした経験は、その後長くの私の人生に大きな影響を及ぼしたと思つている。

後に、アメリカで知り合った友人のベスや、ホストファミリーのシンガー氏も、娘さんと一緒に次々と来日した。娘さんを犬山のリトル・ワールドに案内し、歓迎パーティーをするなどして、今度はみなさんをおもてなしする側にもなつた。帰国後も英語の勉強を細々と続けていてよかつたと思つている。

この本を手にとって下さつた方の中には、なぜ今になって、若いころの留学体験を本にしようと思つ

たのだろうと、感じるひともいるかもしれない。

きっかけは、亡き父の23回忌に『偲』という亡き父の自伝のようなものを書いて出版したことだ。近親や父の友人に配り、大変喜んで頂いた。天国の父への良い供養になったのではないかと自負している。主婦がひとりで、亡き父の追悼本を出版したという物珍しさもあり、ミニコミ誌の取材も受けた。全く見ず知らずの方にも『偲』を手にとって頂き、「続編を書いてみたらどう？」と言って下さる方もいた。そして亡き父の追悼本『偲』の出版が思わぬご縁を結んでくれた。

取材をしてくれたミニコミ誌の社長が、私の本をおもしろがって購入して下さったのだ。「よかったら、うちで記者をやりませんか」と、誘いをうけた。

2026年現在、私はそのミニコミ誌の記者として働いている。

生まれも育ちも春日井の私。とは言え、まだ知らない場所もたくさんある。取材ではいろいろな人との出会いがある。楽しんでやらせて頂き、感謝している。

文章を書くことは楽しい。

一応ライターの仕事はしているが、私にとって文章を書くことは「遊び」である。無意識のうちにやっってしまう習慣のようなものかもしれない。

父の追悼本を出してから、少し時間が経ち、

「自分が今書き残しておきたいもの、それは何だろう」

「自分の人生に最も深く影響を与えた経験は、何だったのだろう」

そんなことを考えるようになった。

日々の雑事や育児、記者の仕事をしながらもそのことについて私は常に考えていた。父の自伝を書いたことで、日記やノート類を読み返し、アルバムを整理し、古い記憶が呼び起されたということもあるのかもしれない。

*

たった2カ月間、アメリカに短期留学したていどでは、大した経験にならないと言うひともいるかもしれない。だが私にとってはとても大きな出来事であった。

多感な20歳のころに出会った人や異文化体験、考えたこと、感じたことは、私に大きな影響を与えた。アメリカで出会った人々は、赤の他人である私に本当に親切にしてくれた。世界には多様な価値観があると気づかせてくれた。

また、大学生だったころの私は、国文学などという、お金にならぬものを勉強することなどやめてしまおうかしらと本気で考えていた。

そんな青い鳥症候群の私を、もとの定位置に戻してくれたのはアメリカ留学だった。自分の学んでいる国文学や、日本の文化のすばらしさを、海外で再発見できたのだ。

アメリカで身につけた英語を忘れまい、と通っていた英語教室で、人生の伴侶にも出会えた。今は記者の仕事をしているが、この仕事をする前は、実は子育てをしながら英会話教室をしていた。アメリカで

過ごした日々がなければ、今の自分はまた違った生き方をしていたのかもしれない。

今回、この本を書くために丹念にフィラデルフィアにいたときの日記を読み返して感じてるのは、日記を読んでいる時の自分は一瞬にして20歳の自分に、ワープする、ということである。

「あのとき、あれだけのことがひとりでもやれたのなら、私はまだ何かやれるのかもしれない」と日記を読んだあとは、どこか前向きになっている自分がいるのだ。当時は何気なく書いていた日記だが、20歳の自分が今の私を元気づけてくれるのだ。

『フィラデルフィア日記』を出版しようと思ったのは、自分が大切にしてきた想い出を形にして残しておきたい、という気持ちがあったからである。一部の誤字などは訂正したがほぼ、当時の日記のままである。

「書く」ということを今まで続けてきたその原点は何だったのだろうか。アメリカ留学をふくめ、やはり20歳ごろに考えたことや、出会った人の影響が、大きかったように思う。親の影響もある。私の母は美術教師をしていたが、本当は文芸の道に生きたいと願っていたそうである。文学好きな母に言われて私は幼少期に日記をつけていた。おかげで作文が上手いと学校の先生にたびたび褒められたりもした。どちらかと言えば周囲の期待に沿うように生きてきた。

そんな平穏主義の私でも、50歳を超えると「好きなことをやる時間と体力はあとのくらいあるのだろうか」そう考えずにはいられない。20歳のころのように時間は無限にはないことだけは確かなのだから。意識しないで過ごす時は本当にあっという間に過ぎてしまう。恐ろしいくらいだ。

子育て、親の介護、仕事や趣味の旅行など、50代はやりたいことや、やらなくてはならないことが山積みである。少し体力方面では衰えを感じながらも、何とかやれることもあるのかも、そんなところである。

*

最後に。

私、玉置由紀子（たまおきゆきこ）について。

1973年愛知県春日井市生まれ、春日井市育ちの二児のアラフィフママである。縁あって2025年から地元春日井市でミニコミ誌の記者をはじめた。

本や小説が好きで大学では国文学を専攻した。だが、本や文章を書く仕事はお金にならないと分かっていたので、仕事にしようとは全く思わなかった。普通に結婚し、普通に幸せに生きよう。そんなことを考えて今まで、安穩とすごしてきた。

50歳手前で子宮の病を得たことにより、ふと自分の人生を振り返る時間が出来た。そのときに、「自分は今まで自分の好きなことに、本気で取り組んだことがあったのだろうか」という思いにかられ、父の自伝『偲』を書いた。そして、「自分の人生に最も深く影響を与えた経験は、何だったのだろうか」という気持ちに形を与えるために『フィラデルフィア日記』を出版した。

地元、春日井愛は誰にも負けてはいないつもりだが、アメリカ・フィラデルフィアで過ごした日々のはとは時折心に思い浮かべて楽しんでいる。

日記を書いたのは20歳のころの自分。半世紀を生きてきた今の私からすると、未熟さの残る、恥ずかしい箇所も随所にあるが、あえて消さずにそのままにしておいた。それもまたおもしろいではないか。これは今の私から、20歳の私への贈り物なのだ。そして『偲』が父の物語ならば『フィラデルフィア日記』は私の物語である。フィラデルフィアで過ごした日々には、その後に経験する人生の喜怒哀楽の元が全てつまっていたように感じている。

旅行の楽しさに目覚めた私は、帰国後、あちらこちらへと旅をした。国内でのひとり旅をはじめ、友人と連れ立ってベトナムや中国、バリなどを旅したこともあった。会社の研修旅行でグアムにも行き、新婚旅行ではスペインに行った。結婚後は夫とともに、フランスやイタリアなどヨーロッパの美術館を巡った。子育て中の今では、なかなか行けないような場所に行き、美しい景色やグルメを堪能することができたのは、幸せなことであったと思う。

それらの旅のなかでも、私にとって一番思い出深いのが、フィラデルフィアで過ごした日々である。あの旅は、他のどの旅とも違っていった。20歳の多感な時期であった。多くの学びと気づきがあった。単に楽しいだけの旅ではなかった。語学学校に通っていたのでレポートも多く、英語でそれらをこなすのは大変な作業であった。敬虔なユダヤ人の生活スタイルに、戸惑いを覚えたこともあった。異国の友人が出来て共にすごしたこと、別れに涙したこと。12年ぶりにスワースモア小学校時代の恩師と再会し、ワシントンDCで一緒に桜を見たこと。日本の文化や歴史について無知であると知って恥ずかしかったこと。やはりあの旅が、自分の原点を作ってくれたと感じている。

たったひとりで飛行機に乗り、ステイ先に迎え入れられた日の緊張感。

学校で世界から来た友と出会って友情をはぐくんだった日。

文化の違いに戸惑いながらもシンガー家の人とくらしした日々。

日本が恋しくてホームシックになった日。

妙な日本料理を作ってお腹をこわした日。

友達とニューヨークを闊歩した日。

ワシントンDCで見た美しい桜とパレード。

フィラデルフィアの街を歩き回って、別れを告げた日。

旅立ちの日の朝、ご主人が、強く私を抱きしめて頬にキスしてくれた日。

あの白い美しい家のドアが、朝、ガチャリと静かに閉まる音……。

フィラデルフィアで過ごした20歳の素晴らしい日々は、永遠に心に残っている。

今の私は、20歳のころの私と比べると、どうだろう。半世紀も生きてきたわりには、あまり賢くはなっていない。家族ができ、1日の半分は子育てに追われている。時々気まぐれに文章を書いて遊ぶ。遠くに行くための翼を失いたくないから、英語の勉強をしている。あくまで細々と。何か面白いことを探し求めようとする好奇心は、幸いにしてまだある。空をフワリ、フワリと漂う雲のように、心はいつだって自由だ。

あの20歳のころと同じように。

2026年5月吉日

フィラデルフィア日記

著 者 玉置 由紀子

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
